ぶつける言葉が無くなって仕方なくナオヤを睨みつける。
ナオヤは布団の上に身を起こしたまま、何故か楽しそうに口角を引きあげてオレを手招きした。寝ないわけにはいかないからおそるおそる元の位置に戻る。
「まだ何かするつもり？」
明らかに面白がっていると判る笑顔に警戒を解けない。やっぱり一緒に寝るのはよそうかと身を引いた時、ナオヤの掌が撫でるようにオレの頭に乗せられた。思わず目をぎゅっと瞑る。
「ククク、ようやくいつもの声になったな」
「あ……」
言われてオレは、ナオヤに電話をかけた時からずっと続いていた緊張がすっかり解けていた事に気づいた。怒鳴っているうちに言葉を選ばなきゃって思いも忘れていた。
ぽんぽんと軽く頭を叩かれて慌てて布団に潜りこむ。目の奥も頬もじわりと熱い……ちょっと今は、見られたくない顔をしているような気がする。
また小さく笑う声が聞こえた。ナオヤが部屋の灯りを消して、その後はもう一言も喋らない。
「ナオヤ」
返事は無い。少しだけ顔を出して窺うと、こちらに背中を向けているようだった。
「今日は、その……ありがとう」
ようやく思いだせた。オレとナオヤは何でも遠慮無く言いあえる仲だった。怒らせないようにと機嫌を取ろうとしてみてもナオヤにも不自然にしか見えないのだろう。
今夜もあの日のようにナオヤが歩み寄ってくれた。オレはいつも肝心なところでこの人に頼ってばかりいる。
ナオヤ。あのね、オレはナオヤに話したい事がたくさんあるんだ。神様や天使の事もそうだけど、何よりオレはナオヤに幸せになってほしいんだ。
それからオレは昔のようにナオヤのアパートを訪れるようになった。
ずっとナオヤを好きだった。それは大切な従兄だからだと思っていた。
抱きしめられたら嬉しくて、誉められたら誇らしい自慢の従兄。兄弟のように育った大切な家族……これまでと全く同じ関係には戻れなくてもオレ達は家族だ。オレがもっと頑張ればいつか本当の兄弟として一緒に神の許に帰れるかもしれない。ナオヤがそれを望んでくれるまでオレはこの地上でナオヤの《弟》として側にいようって……ずっと一緒にいたいって思ったんだ。